

関連用具



漁で捕ってきた魚は、女性たちの手に渡ります。かごに詰めて頭に乗せ、まちからまちへと売り歩きました。残った魚は、かまぼこにして売ること。男が捕り、女が売り、そして加工する。糸満の漁は、家族みんなで支えあって成り立っていました。網をつくる道具、魚を量る秤。暮らしを支えた道具までもが残っています。

主な道具「バーク」

魚を入れて運ぶためのかご。浜で待つ女性たちは、男性が捕ってきた魚を、このかごに詰めて、売りに行きました。時には、遠い那覇の町まで何キロもの道のりを歩いて行き来したそうです。



漁具用具



海のどこで、何を、どうやって捕るか。糸満の海人は、それぞれにぴったりの道具を持っていました。浅瀬に網をしかけるアンブシ漁、何艘ものサバニで沖に出て、海人の素潜りで魚を追い込むアギヤー漁、釣り漁や突き棒漁。狙う魚も、イカ、サメ、カツオ、カジキと実にさまざまです。これだけの漁を、海人は道具を使い分けながらこなしてきました。

主な道具「ミーカガン」

明治17年ごろ、糸満海人の玉城保太郎が考えた水中眼鏡。これで海中の視界が劇的に良くなり、潜水で貝や魚を捕る量が増大しました。漁を発展させた発明として、国もその価値を認めています。



舟用具



糸満の海人にとって、サバニと呼ばれる木の舟は、まさに足そのものでした。この舟を使って、沖縄の海はもちろん、九州や本州、はるか東南アジアの海で漁をしていました。最初は1本の木をまるごとくり抜いて造っていましたが、やがて板を何枚もつなぎ合わせる造り方へ。そうして、より遠くへ行ける、機能美をもつ舟になっていきました。

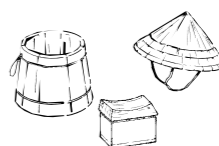
主な道具「ユートウイ」

サバニの底にたまった海水を、かき出すための道具。海に出れば、海水はどんどん中に入ってきます。そのため、海人たちは常にこの道具を持っていました。小さな道具ですが、海に出るために必要な道具です。



道具でたどる

海人のまち



舟を造り、海に潜って魚を捕り、かごを乗せて売り歩く。漁の支度から流通までの一連の道具が残る漁師まちは、全国を見渡しても、ほとんどありません。887点のそれぞれが、当時の暮らしを物語ります。

国はこのように評価しました

今回、国が有形民俗文化財として登録した際の評価ポイントなどは、市のホームページでご覧いただけます。糸満の海とともにあった道具たちの希少性を、ぜひご確認ください。



ホームページ

道具に会える場所。糸満海人工房・資料館／海のふるさと公園展示館

住所 西崎町1丁目4番11号

連絡先 987-1550

開館日時 火～日曜日

9時～12時／14時～17時

見学料金 大人300円

小・中・高校生100円

その他 旧盆・年末年始・旧正月

は休館です。また、ミーカガンづくりやビンダマ編みなどの体験もできます。

詳しくは施設のホームページへ。



ホームページ



糸満市教育委員会
生涯学習課
むつるけんたろう
無津呂 健太郎 さん

資料をはじめて見たとき、こんなに多くの用具が保存状態よく残っていることに驚きました。漁の用具もさることながら、女性たちが販売に使用していた用具などもそろい、これは将来にまで残さなければと思いました。

漁は海だけでは成り立ちません。用具を作る人、魚を捕る人、運んで売る人たちがいて、はじめて暮らしとなる。そんな暮らしの様子を鮮明に今に伝えてくれる用具たちを、ぜひ展示館まで見に来てください！